# 事例研究を語るための言葉を求めて

川上 桃子
［東アジアの経済・産業発展論］

私の専門は、台湾を中心とする東アジアの産業・企業の研究である。特定産業の発展過程を分析する「産業研究」と、特定の国・地域の政治や経済の特質を分析する「外国地域研究」の境目で、細々と実証分析を続けてきた。その過程で私が直面してきた困難のひとつが、「良い事例研究とは何か」を語ることの難しさだ。

自然科学や社会科学の一部の分野では、優れた研究とは何かについての基準の共有が進んでいる。仮説の意義、因果関係を推論する際の手続きの妥当性、得られた知見の新奇さといったいくつかの尺度を定め、それに沿って議論を進めれば、たとえ評価者のあいだで評点にばらつきが生じたとしても、そのギャップを埋めるためのコミュニケーションが成り立つだろう。

これに対して産業研究や外国地域研究では、研究手法の標準化の度合いも、優れた研究とは何かについての基準の共有化の度合いもはるかに低い。私自身、ある事例研究の良さを語ろうとして、まるで映画や音楽について語る時のように、自分の好みやあこがれを語ってしまうことがある。

だが、「優れた事例研究とは何か」を伝え、研究者同士で語り合うための明快な言葉を持つことができなければ、自分の研究が抱える問題を特定することも、互いの研究の問題点を伝え合うこともままならない。私達がよりよい事例研究を志すなら、何がなんでも、「優れた事例研究とは何か」を語るための言葉をつかみとらねばならないのである。

## ●伊丹敬之『創造的論文の書き方』（有斐閣、二〇〇一年）

私は、経営学者・伊丹敬之の著作を読むたび、複雑な企業現象からシンプルな概念を引き出すその手腕の鮮やかさに引きつけられる。同時に、伊丹の研究に自分が感じる魅力を人にうまく伝えられないことに、もどかしさを感じる。

経営学をベースに産業・企業研究を志す読者に向けて書かれたこの本のなかで、伊丹は、研究とは、目に見える現象の背後に隠されている原理・原則の発見であるという。そして創造的論文とは、多くの人が意義があると思える原理・原則にたくみに迫り、自分が真実と考えるその原理・原則を、説得的かつ分かりやすく述べたものだ、という。

本書のなかで私が強い印象を受けたのが、仮説を育てるプロセスの重要性だ。伊丹は、典型的な研究のあり方として紹介されることの多い仮説検証型研究には、「意義の小さい仮説の厳密な検証」という「摩可不思議」な研究が多い、という。そして、世のなかには意義の深い仮説が意外に少ないこと、萌芽的なアイディアを良い仮説へと育てていく過程こそが研究という営みの中心にあることを論じる。また、仮説を育てていくうえでは、論理的推論と証拠探しのプロセスを、螺旋ねじのようにぐるぐると周りながら掘り下げていく過程が重要であるという。

なるほど、「見えざる資産」概念をはじめとする伊丹の議論が優れているのは、厳密な検証には適さないかもしれないけれども、企業という組織を理解するうえでの意義深い仮説を提示することに成功しているからだ。またその議論が、論理的推論と現実の観察の往復運動のなかから導かれており、その分析が、データ、厚い記述、論理の三点セットによって肉付けされているからだ。本書を読み返すたび、私は、事例研究を語るための自分の語彙が少しだけ豊かになったことを感じる。

## ●佐藤郁哉・芳賀学・山田真茂留『本を生みだす力　学術出版の組織アイデンティティ』（新曜社、二〇一一年）

事例研究をする人はしばしば「良いテーマ」を求めて道に迷う。そんな迷える事例研究者に対して、伊丹は右の著作のなかで「まず、風呂に入れ。一度とにかくとっぷり浸かれ」と勧める。理由は後からついてくる。まずは面白そうだと思う風呂に入ればいいのだ、と。

社会学者の佐藤郁哉は、ひとつの風呂にとっぷりと浸かるうえに、タイプの違う温泉を次々と制覇する「湯浴み名人」である。その成果には『暴走族のエスノグラフィー』（新曜社、一九八四年）『現代演劇のフィールドワーク』（東京大学出版会、一九九九年）などの名著があるが、ここでは、学術出版社の分析を通じて学術コミュニケーションのエコロジーを描き出した共同研究の成果である『本を生み出す力』を紹介したい。

本書の醍醐味は、伊丹のいう「現実と理論の間を行きつ戻りつするプロセス」にある。著者らはまず、考察のための導きの糸として、「ゲートキーパー、複合ポートフォリオ戦略、組織アイデンティティ」という三つの鍵概念を導入する。次いで、これを手がかりに、四社の学術出版社の詳細な事例分析を行う。それを受けて鍵概念の練り直しを行い、さらにそれをもとに学術出版の制度分析へと広げていく。著者らが理論的考察と事例観察を「螺旋ねじのようにぐるぐると掘り下げていく」粘り強い分析のプロセスが、伊丹の挙げる良い文章の条件である「（思考や調査の試行錯誤の）舞台裏を見せるな」「リニアーに書け」にマッチした書きぶりによって提示されていくさまは、実に見事だ。

著者らは、日本の学術出版社というマイクロな世界のマイクロな営みの分析のなかから、日本の文化生産のエコロジーという大きな見取り図を示すことに成功している。三人の共著でありながら強い統合性をもつ本に仕上がっている点も著者らの『本を生み出す力』の現れである。私にとっての事例分析の手本であり、優れたケーススタディを考えるうえで常にベンチマークとなる書物である。

## ●杉山春『ルポ虐待　大阪二児置き去り死事件』（ちくま新書、二〇一三年）

優れたノンフィクションは、ひとつの事件、一人の人生の固有の姿を克明に描くことを通じて、私たちの社会の「目に見える現象の背後にあるもの」に光をあてる。

二〇一〇年の夏、風俗嬢の母親によって大阪のマンションの一室に置き去りにされた二人の幼児が無残な姿でみつかった。この事件を追った本書のなかで、杉山は、子どもを重荷に感じ、母親であることを「降りた」ようにみえるこの女性が、実際には最後まで子どもたちへの深い愛情を抱いていたこと、むしろ彼女が母親であることを「降りる」ことができなかったことこそが、この母子を追いつめていったことを明らかにする。

本書が優れているのは、事件をみるための視座として、心理鑑定者の見解や虐待に関する臨床的知見といった足がかりを導入し、これによって、多くの人が「理解できない」と感じるであろうこの若い母親の矛盾に満ちた行動への理解の扉を開けることに成功したことだ。専門知の援用と、一人の女性の道のりの克明な検証とが結びついてはじめて、私たちは、この異様な事件が決して異様なものではないこと、これが私たち自身の問題であることを知ることになる。優れた書き手が、ひとつの事例を深く掘り下げることで、世界を広く見渡す高台へと読み手を導いてくれることを知るとき、私は優れた事例分析に可能なことを思い、身が引き締まる思いがする。

## ●事例研究を語りあう

研究というのは社会的な営みだ。しかし、ある研究を「優れている」と思う認知は、眼前にあるテキストと、読み手がそれまで読み、考え、書いてきたことの蓄積との間に生じる反応によってもたらされる。それは個人的な体験に根ざす化学反応であり、親しい研究仲間の間であっても共有しきれないものだ。

それでも、よりよい事例研究をしたいと思うなら、それについて研究者同士が語りあうための語彙と語り方を探り続けていくほかあるまい。多くの事例研究を読み、優れていると心から感服する研究とひとつでも多く出会うことは、その第一歩だろう。

（かわかみ　ももこ／アジア経済研究所　東アジア研究グループ）